

夏目漱石

薙露行



薤
露
行

世に伝うるマロリーのアーサー物語は簡淨素樸そぼくと云う点に於おいて珍重すべき書物ではあるが古代のものだから一部の小説として見ると散漫の譏そしりは免がれぬ。況まして材をその一局部に取まつて纏まとったものを書こうとすると到底万事原著による訳には行かぬ。従つてこの篇の如きも作者の随意に事実を前後したり、場合を創造したり、性格を書き直したりして可成小説に近いものに改めてしもうた。主意はこんな

事が面白いから書いて見ようというので、マロリーが面白いからマロリーを紹介しようと言うのではない。その積りで読まれん事を希望する。

実を云うとマロリーの写したランスロットは或る点に於て車夫の如く、ギニヴィアは車夫の情婦の様な感じがある。この一点だけでも書き直す必要は充分あると思う。テニソンのアイジルスは優麗都雅の点に於て古今の雄篇たるのみならず性格の描写に於ても十九世紀の人間を古代の舞台に躍らせる様なきぶりであるから、かかる短篇を草するには大に参おお

考すべき長詩であるは云うまでもない。元来なら記憶を新たにすゝる為め一応読み返す筈であるが、読むと冥々めいめいのうちに真似がしたくなるからやめた。

一 夢

百、二百、簇むらがる騎士きしは数をつくして北きたの方なる試合
 へと急げば、石に古りたるカメロットの館やかたには、只王
 妃ギニヴィアの長く牽ひく衣ころもの裾の響のみ残る。

薄うすくれない紅の一枚をむざとばかりに肩より投げ懸けて、白
 き二の腕さえ明らさまなるに、裳もすそのみは軽かるく捌さばく珠たまの履くつ
 をつつみて、猶なお余りあるを後ろざまに石階の二級に垂れ

て登る。登り詰めたる階きざはしの正面には大いなる花を鈍色にびいろ
 の奥に織り込める戸帳とばりが、人なきをかこち顔なる様にて
 そよとも動かぬ。ギニヴィアは幕の前に耳押し付けて一
 重向うに何事をか聴く。聴き了りたる横顔を又真向まむこうに
 反えして石段の下を鋭どき眼にて窺うかがう。濃こまやかに斑ふを
 流したる大理石の上は、ここかしこに白き薔薇ばらが暗きを
 洩れて和やわらかき香りを放つ。君見よと宵に贈れる花輪の
 いつ擽くだけたる名残か。しばらくは吾が足に纏まつわる絹の音
 にさえ心置ける人の、何の思案か、屹きと立ち直りて、織ほそ
 き手の動くと見れば、深き幕の波を描いて、眩まばゆき光り

矢の如く向い側なる室の中よりギニヴィアの頭かしらに戴ける冠を照らす。輝けるは眉間みけんに中あたる金剛石こんごうせきぞ。

「ランスロット」と幕押し分けたるままにて云う。天を憚はばかり、地を憚はばかる中に、身も世も入らぬまで力の籠こもりたる声である。恋に敵なければ、わが戴ける冠おそを畏れず。

「ギニヴィア！」と応こたえたるは室の中なる人の声とも思われぬ程優しい。広き額うづを半ば埋めて又捲まき返る髪あおしろの、黒きを誇るばかり乱れたるに、頬の色は釣り合わず蒼白あおしろい。

女は幕をひく手をつと放して内に入る。裂目を洩れて斜めに大理石の階段を横切りたる日の光は、一度に消えて、薄暗がりの中に戸帳の模様のみ際立ちて見える。左右に開く廻廊には円柱まるばしらの影の重なりて落ちかかれども、影なれば音もせず。生きたるは室の中なる二人のみと思わる。

「北の方なる試合にも参り合せず。乱れたるは額にかか
る髪のみならじ」と女は心ありげに問う。晴れかかりた
る眉に晴れがたき雲の蟠わだかまりて、弱き笑の強いて憂うれいの
裏うちより洩れ来るきた。

「贈りまつれる薔薇の香に酔えいて」とのみにて男は高き窓より表の方かたを見やる。折からの五月である。館を繞めぐりて緩ゆるく逝ゆく江えに千本の柳が明かに影を蘸ひたして、空に崩くずる雲の峰さえ水の底に流れ込む。動くとも見えぬ白帆に、人あらば節面白き舟歌も興がろう。河を隔こてて木の間隠れに白く拖ひく筋の、一縷るの糸となつて烟けむりに入るは、立ち上る朝日影に蹄ひづめの塵ちりを揚げて、けさアーサーが円卓の騎士と共に北の方へと飛ばせたる本道である。

「うれしきものに罪を思えば、罪長かれと祈る憂き身ぞ。君一人館に残る今日を忍びて、今日のみの縁えにしとな

らばうからまし」と女は安からぬ心の程を口元に見せて、
珊瑚さんごの唇をぴりぴりと動かす。

「今日のみの縁えにしとは？ 墓せに堰せかるるあの世までも渝かわらじ」と男は黒き瞳ひとみを返して女の顔を昵と見る。

「さればこそ」と女は右の手を高く挙げて広げたる掌てのひらを豎たてにランスロットに向ける。手頸てくびを纏まとう黄金こがねの腕輪うでわがきらりと輝くときランスロットの瞳は吾知らず動いた。

「さればこそ！」と女は繰り返す。「薔薇の香に酔える病やまいを、病と許せるは我等二人のみ。このカメロットに集まる騎士は、五本の指を五十度繰り返えすとも数え難きに、

一人として北に行かぬランスロットの病を疑わぬはなし。束つかの間に危むさぼうきを貪りて、長き逢う瀬ふちの淵と変らば……」と云いながら挙げたる手をはたと落す。かの腕輪は再びきらめいて、玉と玉と撃てる音か、戛かつぜん然と瞬時の響を起す。

「命は長き賜物ぞ、恋は命よりも長き賜物ぞ。心安かれ」と男はさすがに大胆である。

女は両手を延ばして、戴ける冠を左右より抑えて「この冠よ、この冠よ。わが額の焼ける事は」と云いう。願う事の叶かなわばこの黄金、この珠たま玉の飾りを脱いで窓より下

に投げ付けて見ばやといえる様である。白き腕かいなのすらりりと絹をすべりて、抑えたる冠の光りの下には、渦を巻く髪かみの毛の、珠の輪には抑え難くて、頬ほおのあたりに靡なびきつつ洩もれかかる。肩にあつまる薄紅の衣の袖そでは、胸を過ぎてより豊かなる襞ひだを描がいて、裾は強けれども剛かたからざる線を三筋程床の上まで引く。ランスロットは只窈窕ようちようとして眺めている。前後を截断せつだんして、過去未来を失念したる間に只ギニヴィアの形のみがありありと見える。

機微ふかの邃ふかきを照らす鏡は、女の有もてる凡すべてのうちにて、尤もっとも明かなるものと云う。苦しきに堪えかねて、われ

とわが頭かしらを抑えたるギニヴィアを打ち守る人の心は、
 飛ぶ鳥の影の疾ときが如くに女の胸にひらめき渡る。苦し
 みは払い落す蜘蛛くもの巣と消えて剩あますは嬉しき人の情なさけば
 かりである。「かくてあらば」と女は危ひまうき間に際きわどく擦す
 り込む石火せつかの楽たのしみみを、長とこしえに続つづけかすと念ねんじて両頬
 に笑えみを滴したたらす。

「かくてあらん」と男は始めより思い極ていめた態である。
 「されど」と少しばし時して女は又口を開く。「かくてあらん
 為ためめ——北の方なる試合に行き給え。けさ立てる人々の
 蹄あとの痕あとを追おい懸かけて病癒いえぬと申し給え。この頃の蔭口、

二人をつつむ疑の雲を晴し給え」

「さ程に人が怖くて恋がなるか」と男は乱るる髪を広き額に払って、わざとながらからからと笑う。高き室の静かなる中に、常ならず快からぬ響が伝わる。笑えるははたと已めて「この帳とばりの風なきに動くそうな」と室の入口まで歩を移してことさらに厚き幕を揺り動かしてみ。あやしき響は収まって寂じやくまく寞もとの故に帰る。

「宵見よべし夢の——夢の中なる響の名残か」と女の顔には忽たちまち紅落こうちて、冠の星はきらきらと震う。男も何事か心躁さわぐ様にて、ゆうべ見しと云う夢を、女に物語らす。

「薔薇咲く日なり。白き薔薇と、赤き薔薇と、黄なる薔
 薇の間に臥ふしたるは君とわれのみ。楽しき日は落ちて、
 楽しき夕暮の薄明りの、尽くる限りはあらじと思う。そ
 の時に戴けるはこの冠なり」と指を挙げて眉間みけんをさす。
 冠の底を二重にめぐる一疋びきの蛇へびは黄金の鱗うろこを細かに身
 に刻んで、擡もたげたる頭かしらには青玉の眼がんを嵌はめてある。
 「わが冠の肉に喰くい入るばかり焼けて、頭の上に衣きぬ擦す
 如き音を聞くととき、この黄金の蛇はわが髪を繞めぐりて動き
 出す。頭は君の方かたへ、尾はわが胸のあたりに。波の如く
 に延びるよと見る間に、君とわれは腥なまぐさき縄にて、断

つべくもあらぬまでに纏まつわるる。中四尺を隔まてて近寄る
 に力なく、離るるに術すべなし。たとい忌きわしき絆ぎずななりと
 もこの縄の切れて二人離れ離れに居らんよりはとは、そ
 の時苦しきわが胸の奥なる心遣やりなりき。嚙かまるるとも
 螫ささるるとも、口縄くちなわの朽ち果つるまで斯かくてあらんと思
 い定めたるに、あら悲し。薔薇の花の紅なるが、めらめ
 らと燃え出いだして、繫つなげる蛇を焼かんとす。しばらくして
 君とわれの間にあまれる一尋ひとひろ余りは、真中まなかより青き烟けむり
 を吐いて金の鱗の色変り行くとと思えば、あやしき臭においを
 立ててふすと切れたり。身も魂もこれ限り消えて失うせよ

と念ずる耳元に、何者かからからと笑う声して夢は醒め
 たり。醒めたるあとにも猶耳を襲う声はありて、今聞け
 る君が笑も、宵の名残かと骨を撼がす」と落ち付かぬ眼
 を長き睫まつげの裏うちに隠してランスロットの気色を窺う。七
 十五度の鬪技に、馬の脊すべを滑るは無論、鐙あぶみさえはずせ
 る事なき勇士も、この夢を奇くしとのみは思わず。快から
 ぬ眉根はおのずか自せまら逼りて、結べる口の奥には齒さえ喰い締し
 ばるならん。

「さらば行こう。後おくれ馳ばせに北の方へ行こう」と拱こまぬい
 たる手を振りほどいて、六尺二寸の軀からだをゆらりと起す。

「行くか？」とはギニヴィアの半ば疑える言葉である。疑える中には、今更ながら別れの惜まるる心地さえほのめいている。

「行く」と云い放って、つかつかと戸口にかかる幕を半ば掲げたが、やがてするりと踵くびすを回めぐらして、女の前に、白き手を執りて、発熱かと怪しまるる程のあつき唇を、冷やかに柔らかき甲の上につけた。暁の露しげき百合ゆりの花弁はなびらをひたふるに吸える心地である。ランスロットは後をも見ずして石階を馳け降りる。

やがて三たび馬の嘶いななく音ねがして中庭の石の上に堅き

蹄が鳴るとき、ギニヴィアは高殿たかどのを下りくだて、騎士の出いずべき門の真上なる窓に倚よりて、かの人の出いずるを遅しと待つ。黒き馬の鼻面はなづらが下に見ゆるとき、身を半ば投げだして、行く人のために自き絹の尺ばかりなるを振る。頭かしらに戴ける金冠の、美しき髪を滑りてか、からりと馬の鼻を掠かすめて砕くるばかりに石の上に落つる。

槍やりの穂先に冠をかけて、窓近く差し出したる時、ランスロットとギニヴィアの視線がはたと行き合う。「忌まわしき冠よ」と女は受けとりながら云う。「さらば」と男は馬の太腹をける。白き兜かぶとの挿毛さしげのさと靡なびくあとに、

残るは漠々たる塵ちりのみ。

二 鏡

有のままなる浮世を見ず、鏡に写る浮世のみを見るシ
 ヤロツトの女は高き台うてなの中に只一人住む。活いける世を
 鏡の裡うちにのみ知る者に、面を合あわす友のあるべき由なし。
 春恋し、春恋しと囀さかえずる鳥の数々に、耳側そばだてて木の
 葉隠れの翼の色を見んと思えば、窓に向わずして壁に切
 り込む鏡に向う。鮮やかに写る羽の色に日の色さえもそ

のままである。

シャロットの野に麦刈る男、麦打つ女の歌にやあらん、
 谷を渡り水を渡りて、幽かすかなる音の高き台うてなに他界の声
 の如く糸と細りて響く時、シャロットの女は傾けたる耳
 を掩おおうて又鏡に向う。河のあなたに烟けぶる柳の、果ては空
 とも野とも覚束おぼつかなき間より洩れ出ずる悲しき調しらべと思え
 ばなるべし。

シャロットの路みち行く人もまたことごと悉ことごとくシャロットの女の
 鏡に写る。あるときは赤き帽の首打ち振りて馬追うさま
 も見ゆる。あるときは白き髯の寛ゆるき衣を纏まといて、長き杖

の先に小さき瓢ひたぎを括くくしつけながら行く巡礼姿も見える。又あるときは頭かしらより只一枚と思わるる真白ましろの上衣うわぎ被りかぶて、眼口も手足も確しかと分ちかねたるが、けたたましげに鉦かね打ち鳴らして過ぎるも見ゆる。これは癩らいをやむ人の前世ぜんせの業ごうを自ら世に告ぐる、むごき仕打ちなりとシャロットの女は知るすべもあらぬ。

旅商あきゆうど人の脊せに負える包の中には赤きリボンのあるか、白き下着のあるか、珊瑚さんご、瑪瑙めのう、水晶、真珠のあるか、包める中を照らさねば、中にあるものは鏡には写らず。写らねばシャロットの女の眸ひとみには映ぜぬ。

古き幾世を照らして、今の世のシャロットにありとある物を照らす。悉く照らして扱えらぶところなければシャロットの女の眼に映るものもまた限りなく多い。只影なれば写りては消え、消えては写る。鏡のうちに永く停とどまる事は天に懸る日といえども難かたい。活ける世の影なれば斯かくはかなきか、あるいは活ける世が影なるかとシャロットの女は折々疑う事がある。明らさまに見ぬ世なれば影ともまこととも断じ難い。影なればはかなき姿を鏡にのみ見て不足はなからう。影ならずば？——時にはむらむらと起る一念に窓際まどぎわに馳けよりて思うさま鏡の外なる

世を見んと思ひ立つ事もある。シャロットの女の窓より眼を放つときはシャロットの女に呪のろいのかかる時である。シャロットの女は鏡の限る天地のうちに跼きよく踏せきせねばならぬ。一重え隔て、二重隔てて、広き世界を四角に切るとも、自滅の期を寸時も早めてはならぬ。

去れど有のままなる世は罪に濁ると聞く。住み倦うめば山に遯のがるる心安さもあるべし。鏡の裏うちなる狭き宇宙の小さければとて、憂き事の降りかかる十字の街ちまたに立ちて、行き交う人に気を配る辛らさはあらず。何者か因果の波を一たび起してより、万頃ばんけいの乱れは永却えいごうを極きわめて尽きざ

るを、渦捲く中に頭かしらをも、手をも、足をも攫さらわれて、
 行く吾の果は知らず。かかる人を賢しと云わば、高き台うてな
 に一人を住み古りて、しろかねの白き光りの、表とも裏
 とも分ち難きあたりに、幻の世を尺に縮めて、あらん命
 を土さえ踏まで過すは阿呆あほうの極みであろう。わが見るは
 動く世ならず、動く世を動かぬ物の助にて、余所よそながら
 窺う世なり。活殺しやうじ生死けんこんの乾坤じやうりを定裏ねんしゆつに拈出して、五
 彩の色相を静中に描く世なり。かく観ずればこの女の運
 命もあながちに嘆くべきにあらぬを、シヤロットの女は
 何に心を躁さわがして窓の外なる下界を見んとする。

鏡の長さは五尺に足らぬ。黒鉄くろがねの黒きを磨みがいて本来の白きに帰すマーリンの術になるとか。魔法に名を得し彼の云う。——鏡の表に霧こめて、秋の日の上れども晴れぬ心地なるは不吉の兆ちようなり。曇る鑑かがみの露を含みて、芙蓉ふように滴したたる音を聴くとき、対むかえる人の身の上に危うき事あり。砉然けきぜんと故なきに響を起して、白き筋の横縦に鏡に浮くとき、その人末期まつごの覚悟せよ。——シャロットの女が幾年月の久しき間この鏡に向えるかは知らぬ。朝あしたに向い夕ゆうべに向い、日に向い月に向いて、厭あくちよう事のあるをさえ忘れたるシャロットの女の眼には、霧立つ事も、

露置く事もあらざれば、況まして裂けんとする虞おそれありとは夢にだも知らず。湛たんぜん然として音なき秋の水に臨むが如く、瑩えいろう朗たる面おもてを過ぐる森羅の影の、繽ひんぷん紛として去るあとは、太古の色なき境をまのあたりに現わす。無限上に徹する大空たいくうを鑄固めて、打てば音ある五尺うちの裏に押し集めたるを——シャロットの女は夜毎日毎に見る。

夜毎日毎に鏡に向える女は、夜毎日毎に鏡の傍そばに坐りて、夜毎日毎の繪はたを織る。ある時は明るき繪を織り、ある時は暗き繪を織る。

シャロットの女の投ぐる梭ひの音を聴く者は、淋さびしき臯おか

の上に立つ、高き台うてなの窓を恐る恐る見上げぬ事はない。
 親も逝ゆき子も逝ゆきて、新しき代よに只一人取り残されて、
 命長き吾を恨み顔なる年寄の如く見ゆるが、岡の上なる
 シヤロットの女の住居すまいである。蔦鎖つたす古き窓より洩るる
 梭ひの音の、絶間なき振子しんしの如く、日を刻み月を刻むに急
 なる様さまなれど、その音はあの世の音なり。静なるシヤロ
 ットには、空気さえ重たげにて、常ならば動くべしとも
 思われぬを、只この梭の音のみにそそのかさされて、幽かすか
 にも震うか。淋しさは音なき時の淋しさにも勝まる。恐る
 恐る高き台を見上げたる行人こうじんは耳を掩おほうて走る。

シヤロットの女の織るは不断の繪はたである。草むらの萌もえ
 草ぐさの厚く茂れる底に、釣鐘の花の沈める様を織るときは、
 花の影のいつ浮くべしとも見えぬ程の濃き色である。う
 な原のうねりの中に、雪と散る浪の花を浮かすときは、
 底知れぬ深さを一枚の薄きに置く。あるときは黒き地に、
 燃ゆる焰ほのおの色にて十字架を描く。濁世じよくせにはこびる罪障たてよこ
 の風は、すきまなく天下を吹いて、十字を織れる経緯の
 目にも入いると覚しく、焰のみは繪を離れて飛ばんとす。
 ——薄暗き女の部屋は焚やけ落つるかど怪しまれて明る
 い。

恋の糸と誠の糸を横縦に梭くぐらせば、手を肩に組み
 合せて天を仰げるマリヤの姿となる。狂いを経に怒りを
 緯に、霰ふる木枯の夜を織り明せば、荒野の中に白き髯
 飛ぶリアの面影が出る。耻ずかしき紅と恨めしき鉄色を
 より合せては、逢うて絶えたる人の心を読むべく、温和
 しき黄と思いがれる紫を交る交るに畳めば、魔に誘わ
 れし乙女の、我は顔に高ぶれる態を写す。長き袂に雲
 の如くにまつわるは人に言えぬ願の糸の乱れなるべし。
 シャロットの女は眼深く額広く、唇さえも女には似
 で薄からず。夏の日の上りてより、刻を盛る砂時計の九

たび落ち尽したれば、今ははや午過ぎひるなるべし。窓を射
 る日の眩まばゆきまで明かなるに、室のうちは夏知らぬ洞窟どうくつ
 の如くに暗い。輝けるは五尺に余る鉄の鏡と、肩に漂う
 長き髪のみ。右手めでより投げたる梭を左手ゆんでに受けて、女は
 不図鏡の裡うちを見る。研とぎ澄つるぎしたる劍よりも寒き光の、例
 ながらうぶ毛の末をも照すよと思おうちに——底事なにごと
 ぞ！ 音なくて颯さと曇るは霧か、鏡の面おもては巨人の息を
 まともに浴びたる如く光を失う。今まで見えたシャロット
 トの岸に連なる柳も隠れる。柳の中を流るるシャロット
 の河も消える。河に沿うて往きつ来りつする人影は無論

ささめ。——梭の音ははたと已やんで、女の瞼まぶたは黒き睫まつげと共に微かすかに顫ふるえた。「凶事か」と叫んで鏡の前に寄るとき、曇いっさつは一刷いっさつに晴れて、河も柳も人影も元の如くに見あらわれる。梭は再び動き出す。

女はやがて世にあるまじき悲しき声にて歌う。

うつせみの世を、

うつつに住めば、

住みうからまし、

むかしも今も」

うつくしき恋、

うつす鏡に、
色やうつろう、

朝な夕なに」

鏡の中なる遠柳の枝が風に靡いて動く間に、たちま忽ち銀しろがねの光がさして、熱き埃ほこりを薄く揚げ出す。銀の光りは南より北に向つて真一文字にシャロットに近付いてくる。女は小羊を覗ねらう鷺わしの如くに、影とは知りながら瞬またたきもせず鏡の裏うちを見詰る。十丁にして尽きた柳の木立を風の如くに駈け抜けたものを見ると、鍛きたえ上げた鋼はがねの鎧よろいに満身の日光を浴びて、同じ兜かぶとの鉢金よりは尺に余る白

き毛を、飛び散れとのみ毳さんさん々と靡かしている。栗毛の駒の逞たくましきを、頭も胸も革つつに裏みて飾れる鋏びようの数は篩ふるい落せし秋の夜の星宿せいしゆくを一度に集めたるが如き心地である。女は息を凝らして眼を据える。

曲がれる堤どてに沿うて、馬の首を少し左へ向け直すと、今までは横にのみ見えた姿が、真正面に鏡にむかつて進んでくる。太き槍やりをレストに収めて、左の肩たてに盾を懸けたり。女は領えりを延ばして盾に描ける模様を確しかと見分けようとする体であったが、かの騎士は何の会釈もなくこの鉄鏡を突き破って通り抜ける勢で、愈いよいよ目の前に近づい

た時、女は思わず梭を抛なげて、鏡に向つて高くランスロ
 ットと叫んだ。ランスロットは兜ひさしの廂かの下より耀かがやく眼
 を放つて、シャロットの高うてなき台を見上げる。爛らんらん々たる
 騎士の眼と、針を束つかねたる如き女の鋭うどき眼とは鏡の裡うち
 にてはたと出合つた。この時シャロットの女は再び「サ
 ー・ランスロット」と叫んで、忽ち窓そばの傍に馳け寄つて蒼あお
 き顔を半ば世の中に突き出いだす。人と馬とは、高き台の下
 を、遠きに去る地震の如くに馳け抜ける。

ぴちりと音がして皓ここう々たる鏡は忽ち真二つに割れる。
 割れたる面は再びぴちぴちと氷を砕くが如く粉微塵にな

って室の中に飛ぶ。七卷八卷織りかけたる布帛きぬはふつふ
 つと切れて風なきに鉄片と共に舞い上る。紅の糸、緑の
 糸、黄の糸、紫の糸はほつれ、千切れ、解け、もつれて
 土蜘蛛つちぐもの張る網の如くにシャロットの女の顔に、手に、
 袖に、長き髪の毛かみけにまつわる。「シャロットの女を殺すも
 のはランスロット。ランスロットを殺すものはシャロッ
 トの女。わが末期のろいの呪のろいを負うて北かたの方かたへ走れ」と女は
 両手を高く天に挙げて、朽ちたる木の野分のわきを受けたる如
 く、五色の糸と氷を欺く碎片の乱るる中に鞆どうと仆たおれる。

三袖

可憐なるエレーンは人知らぬ堇の如くアストラットの古城を照らして、ひそかに墜ちし春の夜の星の、紫深き露に染まりて月日を経たり。訪う人は固よりあらず。共に住むは二人の兄と眉さえ白き父親のみ。

「騎士はいずれに去る人ぞ」と老人は穏かなる声にて問う。

「北の方なる仕合に参らんと、これまでは鞭むちろうつて追懸

けたれ。夏の日の永きにも似ず、いつしか暮れて、暗が
 りに路さえ岐わかれたるを。——乗り捨てし馬も恩いななに嘶ななか
 ん。一夜の宿の情け深きに酬なぐさいまつるものなきを耻はず」
 と答こたえたるは、具足を脱はいで、黄わうなる袍ほうに姿を改あらめたる
 騎士きしなり。シャロットを馳はせる時何事とは知らず、岩いわの凹くぼ
 みの秋の水を浴あびたる心地して、かりの宿りを求め得た
 る今に至るまで、頬ほの蒼あきが特更ことさらの如く日に立つ。
 エレーンは父の後ろに小さき身を隠して、このアスト
 ラットに、如何いかなる風の誘いいてか、かく凜り々しき壮夫ますらおを
 吹き寄せたると、折々は鶴と瘡やせたる老人の肩をすかし

て、耻はずかしの睫まつげの下よりランスロットを見る。菜の花、
 豆の花ならば戯たわむるる術すべもあろう。偃蹇えんけんとして澗底かんでいに嘯
 く松が枝には舞い寄る路のとてもなければ、白き胡蝶こちよう
 は薄き翼を収めて身動きもせぬ。

「無心ながら宿貸す人に申す」と稍ややありてランスロット
 が云う。「明日あすと定まる仕合の催しに、後おくれて乗り込む
 我の、何の誰たれよと人に知らるるは興なし。新しきを嫌きらわ
 ず、古きを辞せず、人の見知らぬ盾あらば貸したまえ」
 老人ははたと手を拍つ。「望める盾を貸し申そう。

——長男チアーは去さんぬる騎士の闘技に足を痛めて今猶

蓐じよくを離れず。その時彼が持ちたるは白地に赤く十字架
 を染めたる盾なり。只の一度の仕合に傷きざつきて、その創口きざくち
 はまだ癒えざれば、赤き血架は空しく壁に古りたり。こ
 れを翳かざして思う如く人々を驚かし給え」

ランスロットは腕やくを扼して「それこそは」と云う。老
 人は猶言葉を継ぐ。

「次男ラヴェンは健気けなげに見ゆる若者にてあるを、アーサ
 ー王の催にかかる晴の仕合に参り合わせずば、騎士の身
 の口惜しかるべし。只君が栗毛の蹄ひづめのあとに俱し連れ
 よ。翌日あすを急げと彼に申し聞かせん程に」

ランスロットは何の思案もなく「心得たり」と心安げに云う。老人の頬に畳める皺しわのうちには、嬉しき波がしばらく動く。女ならずばわれも行かんと思えるはエレーンである。

木に倚よるは蔦つた、まつわりて幾世を離れず、宵に逢いて朝あしたに分るる君と我の、われにはまつわるべき月日もあらず。織ほそき身の寄り添わば、幹吹く嵐に、根なしかずらと倒れもやせん。寄り添わずば、人知らずひそかに括くくる恋の糸、振り切つて君は去るべし。愛溶けて瞼まぶたに余る、露の底なる光りを見ずや。わが住める館こそ古るけれ、

春を知る事は生れて十八度に過ぎず。物の憐れの胸に漲みなぎ
 るは、鎖とぎせる雲の 自おのずから晴れて、麗うらちかなる日影の大地
 を渡るに異ならず。野をうずめ谷を埋めて千里の外に暖
 かき光りをひく。明かなる君が眉目びもくにはたと行き逢える
 今の思は、坑あなを出でて天下の春風はるかぜに吹かれたるが如きを
 ——言葉さえ交わさず、あすの別れとはつれなし。
 燭しよく尽きて更こうを惜めども、更尽きて客は寝いねたり。寝
 ねたるあとにエレーンは、合わぬ瞼の間より男の姿の無
 理に瞳の奥に押し入らんとするを、幾たびか払い落さん
 と力つとめたれど詮せんなし。強いて合わぬ目を合せて、この影

を追わんとすれば、いつの間にかその人の姿は既に瞼の裏うちに潜む。苦しき夢に襲われて、世を恐ろしと思ひし夜もある。魂たま消える物の怪の話におののきて、眠らぬ耳に鶏の声をうれしと起き出でた事もある。去れど恐ろしきも苦しきも、皆われ安かれと願う心の反響に過ぎず。われと云う可愛かわゆき者の前に夢の魔を置き、物の怪の祟たりを据えての恐おそれと苦しみである。今宵の悩みはそれ等にはあらず。我と云う個靈の消え失せて、求むれども遂ついに得難きを、驚きて迷いて、果ては情なくて斯かくは乱るるなり。我を司つかさどるものの我にはあらで、先に見し人の姿

なるを奇しく、怪しく、悲しく念じ煩わづらうなり。いつの
 間に我はランスロットと変りて常の心はいずこへか喪うしな
 える。エレーンと吾名を呼ぶに、応こたうるはエレーンなら
 ず、中庭に馬乗り捨てて、廂ひさし深き兜の奥より、高き櫓やぐら
 を見上げたるランスロットである。再びエレーンと呼ぶ
 にエレーンはランスロットじゃと答える。エレーンは亡う
 せてかと問えば在りと云う。いずこにと聞けば知らぬと
 云う。エレーンは微かすかなる毛孔けあなの末に潜みて、いつか昔
 しの様さまに帰らん。エレーンに八万四千の毛孔ありて、エ
 レーンが八万四千壺この香油を注いで、日にその膚はだえを滑なめら

かにするとも、潜めるエレーンは遂に出現し来る期はな
 かるう。

やがてわが部屋の戸帳とばりを開きて、エレーンは壁に釣る
 長き衣きぬを取り出すいだ。燭にすかせば燃ゆる真紅しんくの色なり。
 室にはびこる夜よるを呑んで、一枚の衣に真昼の日影を集め
 たる如く鮮あざやかである。エレーンは衣の領えりを右手めでにつる
 して、暫らくは眩ゆきものと眺めたるが、やがて左に握
 る短刀を鞘さやながら二三度振る。からからと床に音さして、
 すわと云う間に閃ひらめきは目を掠かすめて紅深きうちに隠れる。
 見れば美しき衣の片袖は惜気もなく断たれて、残るは鞘

の上にふわりと落ちる。途端に裸ながらの手燭てしよくは、風に打たれて颯さと消えた。外は片破月かたわれづきの空に更ふけたり。右手めでに捧ぐる袖の光をしるべに、暗きをすりぬけてエレーンはわが部屋を出る。右に折れると兄の住居すまい、左を突き当れば今宵の客の寝所である。夢の如くなよやかなる女の姿は、地を踏まざるに歩めるか、影よりも静かにランスロットの室の前にとまる。——ランスロットの夢は成らず。

聞くならくアーサー大王のギニヴィアを娶めとらんとして、心惑える折、居ながらに世の成行を知るマーリンは、

首を掉^ふりて慶事を肯^{がえ}んぜず。この女後に思わぬ人を慕う
 事あり、娶^{めと}る君に悔あらん。とひたすらに諫^{いさ}めしとぞ。
 聞きたる時の我に罪なければ思わぬ人の誰なるかは知る
 べくもなく打ち過ぎぬ。思わぬ人の誰なるかを知りたる
 時、天^{あめ}が下に数多く生れたるものうちにて、この悲し
 き命^{さだめ}に廻^{めぐ}り合せたる我を恨み、このうれしき幸を享^うけ
 たる己れを悦びて、楽みと苦みの絢^{ないまじ}りたる繩を断たん
 ともせず、この年月を経たり。心疚^やましきは願わず。疚
 ましき中に蜜あるはうれし。疚ましければこそ蜜をも醸^{かも}
 せと思う折さえあれば、卓を共にする騎士の我を疑うこ

の日に至るまで王妃を棄てず。只疑の積もりて証拠あかしと凝らん時——ギニヴィアの捕われて杭くいに焼かるる時——この時を思えばランスロットの夢は未いまだ成らず。

眠られぬ戸に何物かちよと障さわった気合けはいである。枕を離るる頭かしらの、音する方かたに、しばらくは振り向けるが、又元の如く落ち付いて、あとは古城の亡骸なきがらに脉みやくも通わず。静である。

再び障った音は、殆ほとんど敲たたいたと云うべくも高い。慥たしかに人ありと思ひ極きわめたるランスロットは、やおら身を臥床ふしどに起して、「たぞ」と云いつつ戸を半ば引く。差し

つくる蠟燭ろうそくの火のふき込められしが、取り直して今度は戸口に立てる乙女の方にまたたく。乙女の顔は翳かざせる赤き袖の影に隠れている。面映おもはゆきは灯火ともしびのみならず。「この深き夜を……迷えるか」と男は驚きの舌を途切れ途切れに動かす。

「知らぬ路にこそ迷え。年古るく住みなせる家のうちを——鼠ねずみだに迷わじ」と女は微かすかなる声ながら、思い切つて答える。

男は只怪しとのみ女の顔を打ち守る。女は尺に足らぬ紅絹もみの衝立ついたてに、花よりも美しくしき顔をかくす。常に勝る

豊頬ほうぎきょうの色は、湧わく血潮の疾く流るるか、あざやかなる絹のたすけか。ただ隠しかねたる鬢びんの毛の肩に乱れて、頭には白き薔薇ばらを輪に貫ぬきて三輪挿さしたり。

白き香りの鼻を撲つて、絹の影なる花の数さえ見分けたる時、ランスロットの胸には忽たちまちギニヴィアの夢の話が湧き返る。何故なにゆえとは知らず、悉く身は痿なえて、手に持つ燭を取り落せるかと驚ろきて我に帰る。乙女はわが前に立てる人の心を読む由もあらず。

「紅に人のまことはあれ。耻ずかしの片袖を、乞われぬに参らする。兜かぶとに捲まいて勝負せよとの願なり」とかの

袖を押し遣る如く前に出す。男は容易に答えぬ。

「女の贈り物受けぬ君は騎士か」とエレーンは訴うる如くに下よりランスロットの顔を覗く。覗かれたる人は薄き唇を一文字に結んで、燃ゆる片袖を、右の手に半ば受けたるまま、当惑の眉を思案に刻む。ややありて云う。

「戦たたかいに臨む事は大小六十余度、闘技の場に登って槍を交えたる事はその数を知らず。未だ佳人の贈り物を、身に帯びたる試しなし。情あるあるじの子の、情深き賜物を辞いなむは礼なけれど……」

「礼とも云え、礼なしとも云いてやみね。礼の為めに、

夜を冒して参りたるにはあらず。思の籠るこもこの片袖を天
 が下の勇士に贈らん為に参りたり。切に受けさせ給え」
 とここまで踏み込みたる上は、かよわき乙女の、却かえつて
 一徹に動かすべくもあらず。ランスロットは惑う。

カメロットに集まる騎士は、弱きと強きを通じてわが
 盾の上に描かれたる紋章を知らざるはあらず。又、わが
 腕に、わが兜に、美しき人の贈り物を見たる事なし。あ
 すの試合に後おくるるは、始めより出ずる筈ならぬを、半途
 より思い返しての仕業しわざ故である。闘技の埒らちに馬乗り入れ
 てランスロットよ、後れたるランスロットよ、と謳うたわる

るだけならばそれまでの浮名である。去れど後れたるは
 病のため、後れながらも参りたるはまことの病にあらざ
 る証^{あかし}拠よと云わば何と答えん。今幸^{さいわい}に知らざる人の盾
 を借りて、知らざる人の袖を纏^{まと}い、二十三十の騎士を斃^{たお}
 すまで深くわが面^{おもて}を包まば、ランスロットと名乗りを
 あげて人驚かす夕暮に、——誰^{たれ}彼^{かれ}共にわざと後れたる我
 を肯^{うけが}わん。病と臥^ふせる我の作略^{さりやく}を面白しと感ずる者さ
 えあろう。——ランスロットは漸^{ようや}くに心を定める。

部屋のあなたに輝くは物の具である。鎧^{よろい}の胴に立て
 懸けたるわが盾を軽^{かる}々と片手に提^ひげて、女の前に置きた

るランスロットは云う。

「嬉しき人の真心を兜にまくは騎士の誉れ。難有しありがた」と

かの袖を女より受取る。

「うけてか」と片頬かたほに笑えめる様は、谷間の姫百合ひめゆりに朝日影さして、しげき露の痕あとなく晞かわけるが如し。

「あすの勝負に用なき盾を、逢うまでの形身と残す。試合果てて再びここを過よぎるまで守り給え」

「守らでやは」と女は跪ひざまずいて両手に盾を抱く。ランスロットは長き袖を眉のあたりに掲げて、「赤し、赤し」と云う。

この時櫓やぐらの上を鳥鳴からすき過ぎて、夜はほのぼのと明け渡る。

四 罪

アーサーを嫌きらうにあらず、ランスロットを愛するなりとはギニヴィアの己おのれにのみ語る胸のうちである。

北の方なる試合果はてて、行けるものは皆館やかたに帰れるを、ランスロットのみは影さえ見えぬ。帰れかしと念ずる人の便りは絶えて、思わぬものの鑣くつわを連ねてカメロ

ツトに入るは、見るも益なし。一日には二日を数え、二日には三日を数え、遂に両手の指を悉く折り尽して十日に至る今日まで猶なほ帰るべしとの願を掛けたり。

「遅き人のいずこにつな繋がれたる」とアーサーはさままでに心を悩ませる気色きしきもなく云う。

高き室の正面に、石にて築く段は二級、半ばは厚き毛氈もうせんにて蔽おおう。段の上なる、大なる椅子おおいに豊かに倚よるがアーサーである。

「繫ぐ日も、繫ぐ月もなきに」とギニヴィアは答うるが如く答えざるが如くもてなす。王を二尺左に離れて、

床しょうじ几ぎの上に、織ほそき指ゆびを組くみみ合あわせて、膝ひざより下したは長ながき裳もすそにかくれて履くつの在ありかさえ定さだかならず。

よそよそしくは答こたえたれ、心こころはその人ひとの名なを聞ききてさ
え躍たどるを。話わしの種たねの思おもう坪つらに生なえたるを、寒ふき息いきにて
吹ふき枯からすは口くち惜しし。ギニヴィアは又また口くちを開ひらく。

「後あとれて行くものは後あとれて帰かえる掟おきてか」と云いい添そえて片かた
頬ほに笑わらう。女おんなの笑わらうときは危あやうい。

「後あとれたるは掟おきてならぬ恋こひの掟おきてなるべし」とア―サーも穩ま
かに笑わらう。ア―サーの笑わらいにも特別とくべつの意味いみがある。

恋こひという字あざなの耳みみに響こくととき、ギニヴィアの胸むねは、錐きりに

刺されし痛を受けて、すわやと躍り上る。耳の裏には颯さと音して熱き血を注さす。アーサーは知らぬ顔である。

「あの袖の主こそ美しからん。……」

「あの袖とは？ 袖の主とは？ 美しからんとは？」とギニヴィアの呼吸ははずんでいる。

「白き挿毛さしげに、赤き鉢巻ぞ。去る人の贈り物とは見たれ。繋つながるるも道理じゃ」とアーサーは又からからと笑う。

「主ぬしの名は？」

「名は知らぬ。只美しき故に美しき少女と云うと聞く。」

過ぐる十日を繋がれて、残る幾日を繋がるる身は果報なり。カメロットに足は向くまじ」

「美しい少女！　美しい少女！」と続け様に叫んでギニヴィアは薄き履くつに三たび石の床を踏みならず。肩に負う髪の時ならぬ波を描いて、二尺余りを一筋毎に末まで渡る。

夫ふたごころに二心やすなきを神の道との教は古るし。神の道に従うの心易やすきも知らずと云わじ。心易やすきを自ら捨てて、捨てたる後の苦しみを嬉しと見しも君が為しゅんぷうなり。春風に心なく、花おのずか白おのずから開く。花に罪ありとは下くだれる世の言の

葉に過ぎず。恋を写す鏡の明あきらなるは鏡の徳なり。かく
 観うずる裡うちに、人にも世にも振り棄てられたる時の慰藉いしやは
 あるべし。かく観うぜんと思ひ詰つめたる今頃を、わが乗れ
 る足台は覆くつえがされて、踵くびをす支しうるに一塵じんだになし。引
 き付けられたる鉄と磁石の、自然に引き付けられたれば
 咎とがも恐れず、世を憚はばりの関か一重あなたへ越せば、生涯しやうがい
 の落ち付はあるべしと念じたるに、引き寄せたる磁石は
 火打石と化して、吸われし鉄は無限の空裏を冥府よみへ隕おつ
 る。わが坐まわる床几だんの底抜けて、わが乗る壇だんの床崩くずれて、
 わが踏ふむ大地こくの殻裂けて、己おのれを支しうる者は悉く消えた

るに等し。ギニヴィアは組める手を胸の前に合せたるま
ま、右左より骨も摧くだけよと圧す。片手に余る力を、片手
に抜いて、苦しき胸の悶もたえを人知れぬ方へ洩らさんとす
るなり。

「なに事ぞ」とアーサーは聞く。

「なに事とも知らず」と答へたるは、アーサーを欺ける
にもあらず、又己を誣しいたるにもあらず。知らざるを
知らずと云えるのみ。まことはわが口にせる言葉すら知ら
ぬ間に咽のどを転まろび出いでたり。

ひく浪の返す時は、引く折の気色を忘れて、逆さかしまに

岸を噛む勢の、前よりは凄じきを、浪白らさえ驚くかと疑う。はからざる便りの胸を打ちて、度を失えるギニヴィアの、己れを忘るるまでわれに遠ざかれる後には、油然として常よりも切なき吾に復る。何事も解せぬ風情に、驚ろきの眉をわが額の上にあつめたるアーサーを、わが夫と悟れる時のギニヴィアの眼には、アーサーは少らく前のアーサーにあらず。

人を傷けたるわが罪を悔ゆるとき、傷負える人の傷ありと心付かぬ時程悔の甚しきはあらず。聖徒に向つて鞭を加えたる非の恐しきは、鞭てるものの身に跳ね

返る罰なきに、自らとその非を悔いたればなり。吾を疑うアーサーの前に耻ずる心は、疑わぬアーサーの前に、わが罪を心のうちに鳴らす如く痛からず。ギニヴィアは悚然^{しょうぜん}として骨に徹する寒さを知る。

「人の身の上はわが上とこそ思え。人恋わぬ昔は知らず、嫁^{とつ}ぎてより幾夜か経たる。赤き袖の主のランスロットを思う事は、御身のわれを思う如くなるべし。贈り物あらば、吾も十日を、二十日を、帰るを、忘るべきに、罵^のしるは卑し」とアーサーは王妃の方を見て不審の顔付である。

「美しい少女！」とギニヴィアは三たびエレインの名を
 繰り返す。このたびは鋭どき声にあらず。去りとは憐
 を寄せたりとも見えず。

アーサーは椅子に倚る身を半ば回らして云う。「御身
 とわれと始めて逢える昔を知るか。丈に余る石の十字
 を深く地に埋めたるに、蔦這いかかる春の頃なり。路に
 迷いて御堂にしばし憩わんと入れば、銀に鏤ばむ祭壇の
 前に、空色の衣を肩より流して、黄金の髪に雲を起せる
 は誰ぞ」

女はふるえる声にて「ああ」とのみ云う。床しからぬ

にもあらぬ昔の、今は忘るるをのみ心易しと念じたる矢
 先に、忽然こつぜんと容赦もなく描き出されたるを堪え難く思う。

「安からぬ胸に、捨てて行ける人の帰るを待つと、凋しおれ
 たる声にてわれに語る御身の声をきくまでは、天あまつ下くだれ
 るマリヤのこの寺の神壇に立てりとのみ思えり」

逝ゆける日は追えども帰らざるに逝ける事は長とこしえに暗
 きに葬あたむる能わず。思うまじと誓える心に発はっ矢しと中あたる古
 き火花もあり。

「伴いいて館ずこに帰し参らせんと云えば、黄金の髪を動か
 して何い処ずこへとも、とうなずく……」と途中に句を切ったア

アーサーは、身を起して、両手にギニヴィアの頬を抑えながら上より妃の顔を覗き込む。新たなる記憶につれて、新たなる愛の波が、一しきり打ち返したのであろう。

——王妃の頬は屍しかばねを抱くいだが如く冷たい。アーサーは覚えず抑えたる手を放す。折から廻廊を遠く人の踏む音がして、罵ののる如き幾多の声は次第にアーサーの室に逼せまる。

入口に掛けたる厚き幕は総ふさに絞らず。長く垂れて床をかくす。かの足音の戸に近くしばらくとまる時、垂れたる幕を二つに裂いて、髪多く丈高き一人の男があらわれた。モードレッドである。

モードレッドは会釈もなく室の正面までつかつかと進んで、王の立てる壇の下にとどまる。続いて入るはアグラヴェン、たく遅ましき腕の、ゆる寛き袖を洩れて、あか赭き頸の、ころもかたく衣えりの襟くくに括られて、色さえ変る程肉づける男である。二人の後には物色するいとま違なきに、どやどやと、我勝ちに乱れ入りて、モードレッドを一人前に、ずらりと並ぶ、数は凡てすべにて十二人。何事かなくてはかな叶わぬ。モードレッドは、王に向つて会釈せるかしら頭もたを擡もたげて、そこ力のある声にて云う。「罪あるを罰するは王者の事か」

「問わずもあれ」と答えたアーサーは今更と云う面持おももちである。

「罪あるは高きをも辞せざるか」とモードレッドは再び王に向って問う。

アーサーは我とわが胸をたた敲いて「黄金の冠はよこしま邪の頭に戴かず。天子の衣は悪を隠さず」と壇上に延び上る。肩に括る緋ひの衣の、裾は開けて、白き裏が雪の如く光る。

「罪あるを許さずと誓わば、君がかたえ傍に坐せる女をも許さじ」とモードレッドは臆する気色もなく、一指を挙げてギニヴィアの眉間みけんを指す。ギニヴィアはきと立ち上る。

茫然ぼうぜんたるアーサーは雷火に打たれたる唾おしの如く、わが前に立てる人——地を抽ぬき出でし巖いわおとばかり立てる人——を見守る。口を開けるはギニヴィアである。

「罪ありと我を誣いつわいるか。何をあかしに、何の罪を数えんとはする。詐いつわりは天も照覧あれ」と織ほそき手を抜け出でよと空高く挙げる。

「罪は一つ。ランスロットに聞け。あかしはあれぞ」と鷹たかの眼を後ろに投ぐれば、並びたる十二人は悉く右の手を高く差し上げつつ、「神も知る、罪は逃れず」と口々に云う。

ギニヴィアは倒れんとする身を、危く壁掛たすに扶けて「ラ
 ンスロット！」と幽かすかに叫ぶ。王は迷う。肩に纏まつわる緋
 の衣の裏を半ば返して、右手めての掌たなごころを十三人の騎士に
 向けたるままにて迷う。

この時館の中に「黒し、黒し」と叫ぶ声が石磔せきちように響
 を反して、窈然ようぜんと遠く鳴る木枯の如く伝わる。やがて河
 に臨む水門を、天にひびけと、錆さびたる鉄鎖きしに軋きしらせて
 開く音がする。室の中なる人々は顔と顔を見合わす。只
 事ではない。

五舟

「かぶと整に巻ける絹の色に、槍突き合わす敵の目も覚むべし。ランスロットはその日の試合に、二十余人の騎士をたおして、引き挙ぐる間際に始めて吾名をなのる。驚く人の醒さめぬ間まを、ラヴェンと共にらち埒を出でたり。行く末は勿論もちろんアストラットじゃ」と三日過ぎてアストラットに帰れるラヴェンは父と妹に物語る。

「ランスロット？」と父は驚きの眉を張る。女は「あな」

とのみ髪に挿す花の色を顫わす。

「二十余人の敵と渡り合えるうち、何者の槍を受け損じてか、鎧の胴を二寸下りて、左の股に創を負う……」

「深き創か」と女は片唾を呑んで、懸念の眼を睜る。

「鞍に堪えぬ程にはあらず。夏の日の暮れ難きに暮れて、蒼き夕を草深き原のみ行けば、馬の蹄は露に濡れたり。——二人は一言も交わさぬ。ランスロットの何の思案に沈めるかは知らず、われは昼の試合のまたあるまじき派手やかさを偲ぶ。風渡る梢もなければ馬の脊の地を鳴らす音のみ高し。——路は分れて二筋となる」

「左へ切れればここまで十哩マイルじや」と老人が物知り顔に云う。

「ランスロットは馬の頭かしらを右へ立て直す」

「右？ 右はシャロットへの本街道、十五哩マイルは確かにあろう」これも老人の説明である。

「そのシャロットの方かたへ——後より呼ぶ吾を顧みもせで轡くつわを鳴らして去る。已むなくて吾も従う。不思議なるはわが馬を振り向けんとしたる時、前足を躍らしてあやしくも嘶いななける事なり。嘶く声の果知らぬ夏野に、末広に消えて、馬の足搔あがきの常の如く、わが手綱たづなの思うままに

運びし時は、ランスロットの影は、夜と共に微かなる奥に消えたり。——われは鞍を敲いて追う」

「追い付いてか」と父と妹は声を揃えて問う。

「追い付ける時は既に遅くあつた。乗る馬の息の、闇押し分けて白く立ち上るを、いやがうえに鞭って長き路を一散に馳け通す。黒きもののそれかとも見ゆる影が、二丁ばかり先に現われたる時、われは肺を逆しまにしてランスロットと呼ぶ。黒きものは聞かざる真似して行く。幽かに聞えたるは轡の音か。怪しきは差して急げる様もなきに容易くは追い付かれず。漸くの事間一丁程に逼

りたる時、黒きものは夜の中に織り込まれたる如く、ふつと消える。合点行かぬわれは益ますます追う。シャロットの入口に渡したる石橋に、蹄も砕けよと乗り懸けしと思えば、馬は何物にか躓つまずきて前足を折る。騎のるわれは鬣たてがみをさかに扱いて前にのめる。蔓かつと打つは石の上と心得しに、われより先に斃たおれたる人の鎧よろいの袖なり」

「あぶない！」と老人は眼の前の事の如くに叫ぶ。

「あぶなきはわが上ならず。われより先に倒れたるランスロットの事なり……」

「倒れたるはランスロットか」と妹は魂消たまぎゆる程の声

に、椅子の端はじを握る。椅子の足は折れたるにあらず。

「橋の袂たもとの柳の裏うちに、人住むとしも見えぬ庵室あんしつあるを、

試みに敲けば、世を逃れたる隠士の居なり。幸いと冷たき人を担かつぎ入るる。兜を脱げば眼さえ氷りて……」

「薬を堀ほり、草を煮るは隠士の常なり。ランスロットをよみがえ蘇よみがえしてか」と父は話し半ばに我句を投げ入るる。

「よみ返がえしはしたれ。よみに在る人と扱えらぶ所はあらず。

吾に帰りたるランスロットはまことの吾に帰りたるにあらず。魔に襲われて夢に物云う人の如く、あらぬ事のみ口走る。あるときは罪々と叫び、あるときは王妃——ギ

ニヴィア——シヤロットと云う。隠士が心を込むる草の香りも、煮えたる頭かしらには一点の涼気を吹かず。……」

「枕辺にわれあらば」と少女おとめは思う。

「一夜の後のちたぎりたる脳の漸く平らぎて、静かなる昔の影のちらちらと心に映る頃、ランスロットはわれに去れと云う。心許さぬ隠士は去るなと云う。とかくして二日を経たり。三日目の朝、われと隠士の眠覚めて、病む人の顔色の、今朝如何いかあらんと臥床ふしどを窺うかがえば——在らず。劍の先にて古壁に刻み残せる句には罪は吾を追い、吾は罪を追うとある」

「逃れしか」と父は聞き、「いずこへ」と妹はきく。

「いずこと知らば尋ぬる便りもあらん。茫々ぼうぼうと吹く夏野

の風の限りは知らず。西東日の通う境は極めがたければ、
独ひとり帰り来ぬ。——隠士は云う、病怠らで去る。かの人
の身は危うし。狂いて走る方はカメロットなるべしと。

うつつのうちに口走れる言葉にてそれと察せしと見ゆれ
ど、われは確しかと、さは思わず」と語り終すまって盃さかずきに盛る
苦き酒を一息に飲み干して虹にじの如き気を吹く。妹は立つ
てわが室に入る。

花に戯たわむるる蝶ちようのひるがえるを見れば、春に憂あり

とは天下を挙げて知らぬ。去れど冷やかに日落ちて、月
さえ闇に隠るる宵を思え。——ふる露のしげきを思え。
——薄き翼のいかばかり薄きかを思え。——広き野の草
の陰に、琴の爪ほど小さきものの潜むを思え。——畳む羽
に置く露の重きに過ぎて、夢さえ苦しかるべし。果知ら
ぬ原の底に、あるに甲斐かなき身を縮めて、誘う風にも碎
くる危うきを恐るるは淋しかろう。エレーンは長くは持
たぬ。

エレーンは盾を眺めている。ランスロットの預けた盾
を眺め暮している。その盾には丈高たけき女の前に、一人の

騎士が跪ひざまずいて、愛と信とを誓える模様が描かれてい
 る。騎士の鎧は銀、女の衣は炎の色に燃えて、地は黒に
 近き紺を敷く。赤き女のギニヴィアなりとは憐あわれなる工
 レーンの夢にだも知る由がない。

エレーンは盾の女を己おのれと見立てて、跪ひざままずけるをラ
 ンスロットと思う折うちさえある。斯くあれと念ずる思いの、
 いつか心の裏うちを抜け出でて、斯くの通りと盾の表にあら
 われるのである。斯くありて後と、あらぬ礎いしづえを一度ひとた
 び築ける上には、そら事を重ねて、そのそら事の未来さ
 えも想像せねば已やまぬ。

重ね上げたたる空想は、又崩れる。兎戯に積む小石の塔を蹴返す時の如くに崩れる。崩れたるあとの吾に帰りて見れば、ランスロットは在らぬ。気を狂いてカメロットの遠きに走れる人の、吾が傍にあるべき所謂はなし。離るとも、誓さえ渝らずば、千里を繋ぐ牽き綱もあるう。ランスロットとわれは何を誓える？ エレーンの眼には涙が溢れる。

涙の中に又思い返す。ランスロットこそ誓わざれ。一人誓える吾の渝るべくもあらず。二人の中に成り立つをのみ誓とは云わじ。われとわが心にちぎるも誓には洩れ

ず。この誓だに破らずばと思ひ詰める。エレーンの頬の色は褪^あせる。

死ぬ事の恐しきにあらず、死したる後にランスロットに逢い難きを恐るる。去れどこの世にての逢い難きに比ぶれば、未来に逢うの却^{かえ}って易きかとも思う。罌粟^{けし}散るを憂しとのみ眺むべからず、散ればこそ又咲く夏もあり。エレーンは食を断つた。

衰えは春野焼く火と小さき胸を侵^おかして、愁^{うれい}は衣に堪^たえぬ玉骨を寸々^{すんずん}に削る。今までは長き命とのみ思えり。よしやいつまでもと貪^{むさぼ}る願はなくとも、死ぬと云う事

は夢にさえ見したためしあらず、束つかの間の春と思いあたれる今日となりて、つらつら世を観ずれば、日に開く蕾つぼみの中にも恨はあり。円く照る明月のあすをと問わば淋しからん。エレーンは死ぬより外の浮世に用なき人である。

今はこれまでの命と思ひ詰めたるとき、エレーンは父と兄とを枕辺に招きて「わが為めにランスロットへの文ふみかきてたまわれ」と云う。父は筆と紙を取り出でて、死なんとする人の言の葉を一々に書き付ける。

「天あめが下に慕える人は君ひとりなり。君一人の為めに死ぬるわれを憐れと思え。陽炎かげろう燃ゆる黒髪くろかみの、長き乱れの

土となるとも、胸に彫るランスロットの名は、星変る後の世までも消えじ。愛の炎に染めたる文字の、土水どすいの因果を受くる理ことわりなしと思えば。睫まつげに宿る露の珠に、写ると見れば砕けたる、君の面影の脆もろくもあるかな。わが命もしかく脆きを、涙あらば濺そそげ。基督キリストも知る、死ぬるまで清き乙女なり」

書き終りたる文字は怪しげに乱れて定かならず。年寄の手の顫えたるは、老の為とも悲かなしみの為とも知れず。

女又云う。「息絶えて、身の暖かなるうち、右の手にこの文を握らせ給え。手も足も冷え尽したる後、ありと

ある美しき衣きぬにわれを着飾り給え。隙間すきまなく黒き布しき
 詰つめたる小船こぶねの中にわれを載せ給え。山に野のに白はき薔ば薇ら、
 白はき百合ゆりを採り尽して舟に投げ入れ給え。——舟は流し
 給え」

かくしてエレーンは眼ねむを眠る。眠りたる眼は開く期ごな
 し。父と兄とは唯々いとして遺言いの如く、憐あはれなる乙女の
 亡骸なきがらを舟に運ぶ。

古き江さぎに漣なみさえ死して、風吹く事を知らぬ顔がおに平か
 である。舟は今緑り罩こむる陰を離れて中流なに漕こぎ出でずる。
 櫂かい操るは只一人、白はき髪かみの白はき髯ひげの翁おきなと見ゆ。ゆるく搔か

く水は、物憂げに動いて、一櫂かいごとに鉛の如き光りを放つ。舟は波に浮ぶ睡蓮すいれんの睡れる中に、音もせず乗り入りては乗り越して行く。萼うてな傾けて舟を通したるあとには、軽く曳ひく波足と共にしばらく揺れて花の姿は常の静さに帰る。押し分けられた葉の再び浮き上る表には、時ならぬ露が珠を走らす。

舟は杳然ようぜんとして何処いずくともなく去る。美しき亡骸なきがらと、美しき衣きぬと、美しき花と、人とも見えぬ一個の翁とを載せて去る。翁は物をも云わぬ。只静かなる波の中に長き櫂をくぐらせては、くぐらす。木に彫る人を鞭むちうつて起た

しめたるか、櫂を動かす腕の外には活きたる所なきが如くに見ゆる。

と見れば雪よりも白き白鳥が、収めたる翼に、波を裂いて王者の如く悠然ゆうぜんと水を練り行く。長き頸くびの高く伸のしたるに、気高き姿はあたりを払って、恐るるものありとしも見えず。うねる流を傍目わきめもふらず、舳へさきに立って舟を導く。舟はいづくまでもと、鳥の羽はに裂けたる波の合わぬ間を随う。兩岸の柳は青い。

シャロットを過ぐる時、いづくともなく悲しき声が、左の岸より古き水の寂寞じやくまくを破って、動かぬ波の上に響

く。「うつせみの世を、……うつつ……に住めば……」
 絶えたる音はあとを引いて、引きたるは又しばらくに絶
 えんとす。聞くものは死せるエレーンと、とも 艫に坐る翁の
 み。翁は耳さえ借さぬ。只長き櫂をくぐらせてはくぐら
 する。思うに聾なるべし。

空は打ち返したる綿を厚く敷けるが如く重い。流を挟はさ
 む左右の柳は、一本毎に緑りをこめて濛々もうもうと烟けぶる。娑婆しゃば
 と冥府めいふの界さかいに立ちて迷える人のあらば、その人の霊を
 並べたるがこの気色である。画に似たる乙女おとめの、舟に乗
 りて他界へ行くを、立ちならんで送るのでもあろう。

舟はカメロットの水門に横付けに流れて、はたと留まる。白鳥の影は波に沈んで、岸高く峙そばだてる楼閣の黒く水に映るのが物凄ものすごい。水門は左右に開けて、石階の上にはアーサーとギニヴィアを前に、城中の男女なんによが悉く集まる。

エレインの屍しかばねは凡ての屍のうちにて最も美しい。涼しき顔を、雲と乱るる黄金の髪に埋めて、笑える如く横よこたわる。肉に付着するあらゆる肉の不浄を拭ぬぐい去って、靈その物の面影を口鼻の間に示せるは朗かにも又極めて清い。苦しみも、憂いも、恨みも、憤りも——世に忌わし

きものの痕あとなければ土に歸る人とは見えぬ。

王は嚴おごそかなる声にて「何者ぞ」と問う。櫂の手を休めたる老人は唾おうしの如く口を開かぬ。ギニヴィアはつと石階を下りて、乱るる百合の花の中より、エレーンの右の手に握る文ふみを取り上げて何事と封を切る。

悲しき声は又水を渡りて、「……うつくしき……恋、色や……うつろう」と細き糸ふって波うたせたる時の如くに人々の耳を貫く。

読み終りたるギニヴィアは、腰をのして舟の中なるエレーンの額——透き徹とおるエレーンの額に、顫ふるえたる唇を

つけつつ「美しくいき少女！」と云う。同時に一滴の熱き涙はエレインの冷たき頬の上に着る。

十三人の騎士は目と目を見合せた。

日本文学電子図書館

倫敦塔・幻影の盾

著 者：夏目漱石

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館